
我ら科学部！

ミスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我ら科学部！

【コード】

N3080Q

【作者名】

ミスター

【あらすじ】

片菜高校の科学部の日常を描きます。

文化祭にも出ます！

科学部の毎日（前書き）

ちよつとだけ実話を盛り込んでます。

作者自身が化学部です（笑）

科学部の毎日

みなさんこんにちは。

ここは片菜高校へんなのホームルーム棟の二階。
一番奥の部屋。

化学室。

そこで週に三日、活動が行われている部活がある。

科学部だ。

この部活、特に校内で名が知れ渡っていたり全国的な大会で賞を取っているわけではない。
取れるわけがない。
週三日で。

しかし、そんな部活に俺は入っている。

俺の名前は岡品谷津おかしなやし。特におかしいところはない普通の高校生である。

今日も教室を出てすぐの所にある階段を降り二階へ向かう。

化学室へまっすぐだ。

ガラガラガラ…。扉を引いて中に入る。

「あ、変なのが来た」そう言ったのは部長の野御丸仁^{のおまるじん}。

「変なのじゃない。岡品だ」この会話はもう定番。いつものことだ。

さて、活動。

「今日何やんの？」

部長の指示をあおる。

「ん〜。何やりたい？面倒だしいつも通りなんかやってていつも通りの回答。」

いつも通り…。

仕方ない。

「じゃあスライムでも作っとく」

俺の回答。混ぜるだけで失敗もなく分量も気にしないし大して器具も使用しない。

つまり楽な実験。

「わかった」

そう言っただけで部長が異常にでかいビーカーを取り出した。

そこには液体が入っている。

文化祭などでも作らなくていいように常に大量に作り置きしてある飽和ホウシヤ水溶液。

一体何リットル入っているんだろう…。

それを小さいビーカーに移し洗濯のりを適当にぶち込む。

洗濯のりが固まる。

めでたくスライムの出来上がり。
簡単。小学生にもできるであろう。

それをしばらくいじくった後部長に投げつける。

命中！

スライムが散らばった。

掃除が大変。

部長怒る。

…。叱られた。

掃除をしていたら5時になった。

「終わりにして帰ろう」

顧問が出てきた。

散らばったスライムには触れない。

そう。この部活は一時間で終わる。

週に月・火・水曜日しか活動しない。

部長は部員の中で一番成績の悪い奴がなっている。

とにかくグダグダな部活なのです。

来月には文化祭がある。

心配だ…。

科学部の毎日（後書き）

名前とか適当に決めただんで…。

ギャグ要素を入れようかと思っております。

文化祭直前の科学部（前書き）

前回から一カ月。

文化祭へと入っていきます。

文化祭直前の科学部

来月には文化祭がある。そんなこと言ってたのはいつだったけ？

…。

一カ月ってすぐですねえ。

もう来週に迫ってきました。

しかし、何をやるかも決まらない。

「おい！部長！何やんの？それともやらんの？」
俺が聞く。

「やるよ！いろいろ決めないと。まず、生徒会から言われたM-1
に出る人を決める。そしたらこの部活で何の実験やるかを決める」

「わかってんなら早くやれよ！あ、M-1には俺は出ないから」

そう、去年俺はM-1に出された。

しかし、ネタが決まらずアドリブでやった。。。
そんな暗い過去がある。

「え？何で？出る！去年だって所詮突破したじゃん」

「あれは…偶然！とにかく嫌！一年生に出させなさい」

「はあ？おい！待て！」

口をはさんで来たのは一年生。何故か俺にだけ敬語を使わない。

「ん？何？当然だろ！一年生出なさい！」
俺が口をはさんだ一年生を退ける。

「あ、くじ引き！くじ引きで決めれば！な！一年生だけで！」
俺の提案。

「おい、待て。それは不公平だ。あんたのくじもいれよう」
許せない一年生である。

「じゃあくじでいいや。お前のも入れとくから」
部長がキツパリ決めてしまった。

「いやいや、不公平違うし！」

…。なぜ俺の意見は聞き入れられないのだ…？

「よし！じゃあ行くぞ！この中で二人な」

一年生四人＋俺。

当たる確率も半分以下。

これならいける！

「え〜と…。あはははは。谷津が一発目で出た！」

…。この部長…。許せねえ！

「じゃあもつやらなくていいんじゃないですか？」
一年生の一言。

「そうだね。じゃあいいか。一人で頑張って」

こいつら……。いつか見てるよ！仕返ししてやるからな！
心に誓った。

「じゃあ次は文化祭何やるかだな。誰か案ある？」
部長が呼びかける。

部員全員無視。

M - 1 出場者決めるときはみんな嫌だとか言ってたくせに！

因みに部員は全部で15人。
二年生多数。

「あ、言い忘れた。全部で5個やる。三つは決まってるから。人口
いくらとスライム作りと液体窒素ね」
前の二つの実験は準備が楽で混ぜるだけ。しかも小さい子に受けが
良いという素晴らしい実験。

液体窒素はただ食べ物入れて凍らせて配るだけ。

いかにも部長らしい……。

「じゃあさ！ダイラタンシーやらね？」
俺が意見を出す。

「何それ？」

無知な部長だ。

「だから、テレビでよく見るじゃん。片栗粉水に溶かしてさ、力を加えると一瞬固まるやつ」

「あ、あれね。いいよ。楽そうだし」

楽かそうでないかが部長の判断基準らしい。

「じゃあもう一つ。何やる？」

「結晶の展示でどすか？説明書いて並べるだけだし。ひとり詳しい人置いとけば十分なんじゃん？」

「お、いいね。決定」

これで文化祭で何やるか決まった。

「んじゃ、スライム作る練習するわ」

ただ作りたいただけ。というかやることがないので。

「あゝ…はいはい」

スライムを作っていたら人が入ってきた。

…。カメラを持った生徒会役員。

「文化祭宣伝の写真撮らせていただいてもよろしいでしょうか？」
そう言っている。

「え？いいけど…。いま実験やってるの谷津だけだよ」
部長が言った。

他のみんなはトランプやってる。

「あ、いいですよ。それ撮影させてください」

え…。

「一年生！ほら！来なさい！」

「嫌」

みんな逃げた…。

チクシヨウ…。

「じゃあ撮ります」

「あ…」

スライムを手に乗っている謎の写真が撮らされた。

これが宣伝で…？

宣伝にならんよ！

こうして今日の部活が終わった。

「来週は木・金曜日もあるからね」
部長がそういった。

さすがに準備しないと思ったのだろう。

あゝ…。大変だ…。M-1とか…。

文化祭直前の科学部（後書き）

これもちよつと実話入れてます。

この作者もM・1出されました。

因みに文化祭でやった実験も同じにしています。

文化祭前日（前書き）

文化祭前日です。

準備が一切終わってないけど…。

文化祭前日

文化祭を明日に控えた金曜日。

今日は一日中文化祭の準備をする。

授業がない。

こんなにうれしいことはない！

先週あたりから部長が「前日早く帰れるように今週中に終わらせちゃおう」と張り切ってた。

しかし…。

なんだろう、このさまは。

一つも終わってない。

「え〜と。まず一年生！あっちとここの机に新聞紙引いといて。ここがスライムで、あっちが人工いくらね」
俺が一年生に指示を出す。

「あ〜分かった」

珍しく引き受ける一年生。

「そしたら〜：おい！部長！お前はこの机に結晶並べとけ。触るな
って紙と説明書きも用意しとけよ」

何で俺が部長に指示をださなきゃいけないんだ！

「え〜。お前は何やんの？」
部長が聞いてきた。

「俺はダイラタンシー作る。昨日実験したし」

そう、昨日ダイラタンシーの実験をやってみた。
確かにできた。実験は大成功。

しかし…。

散らかることが分かった。

部長が俺たちに投げつけてきたのがいけないような気がするが本番
何があるか分からないのだ。部長が投げるかも知れない。

「ちえ、いいな。自分だけ楽なのを〜」
腹立つ部長だ。

俺はまず水道の横にブルーシートを広げる。
水道の横なら手を洗いやすいだろうという俺の気転。

「部長〜。たらいどこにあんの？」
俺が部長に聞く。

「え〜？知らん。自分で探してくれよ」

使えない…。

俺はたらいを見つけ、そこに片栗粉を入れる。
1キ口くらい入れたらそこに水を入れる。

「うん。こんなもんかな」
俺がつぶやくと…

「お！できた？ちよつとやらせろよ」
部長登場。

「いいけど…ぶつたたいてみ？」

「よっしゃー！」

ぶつたたく部長。
しかし…。

「うあ！おい！固まらねえじゃねえか！」

ざまあ。水が多かったのか片栗粉が足りなかったのか…。
固体にならずダイラタンシーは液体のまま部長にかかった。

「あゝ…そう？水多かつたな」

適当に流す。

まだ始まっても無いのにブルーシートを掃除するはめになった。

完璧なダイラタンシーを二つ作って俺の仕事は終了。

後は人をどう呼ぶかを考える。

「今年の目玉はダイラタンシーだから、それを前面に出した広告を作るべし！さらに貼る場所は許可が降りれば近くのトイレとかが良し！チラシの数は…天気や入場者数を考えると…一日目2000で

二日目が4000つてとこかな。で、入口の扉は外しておく。なるべく入口には部員は立たないように！廊下の電気は常に付けておくこと！この部屋は廊下の一番奥だし、廊下暗いじゃん」
俺が指示を出す。

不思議そうな後輩たち。

「え？何で？うちの文化祭って入場者数は10000人くらいですよ？チラシ少ないじゃん。しかも何故トイレ…？」
後輩が質問してくる。

「分かってないねえ。10000人全てに渡せるとは限らん！しかも、何回も何回も同じもの渡されればそりゃ嫌でしょ。返ってイメージが悪くなりかねん。トイレに貼るのはな、人が立ち止まるからさ。貼っても見てもらえないんじゃないでしょ。それも、近くのトイレならついてくって感じてくるかもしれないし」

「じゃあ、チラシ渡せなかった人は諦めるんですか？」

「いや、君たちが廊下で叫ぶのだ」

「え…」

会議終了。

さっそく扉を外す。

後は明日を待つだけ。

ダイラタンシーを冷蔵庫に入れて解散。

俺は部長と一緒に駅まであるいて帰った。

「あ、お前さあ。M-1のネタは？考えた？明日でしょ？」
部長が言い出す。

「しまった！考えてない。またアドリブ……」

「はあ？去年ボロボロだったじゃん」

「うん。まあいいや。初戦で敗れて二日目はずっと部室にいるからいきなり明日が心配になった。」

文化祭前日（後書き）

次回は文化祭当日と言いたいけど…。

文化祭公開直前！（前書き）

ついに文化祭へ突入です。
公開するまでですけどね。

ちょっと短めの話です。

文化祭公開直前！

土曜日の朝。

今日は学校。

普段なら一人で怒るであろうが…。

今日は違う。

そう。文化祭当日。

俺は真つ先に化学室へ。

「うっす。遅かったな。もう冷蔵庫から出しちゃった〜」
うれしそうな部長。冷蔵庫からダイラタンシーを持ってきている。
自分で触りたいだけなのが見え見え。

「あれ？これ…？ん…？分離してる…」
部長が何か言ってる。

え？分離？

確認してみる。

確かに見事に片栗粉が沈んでいる。

まあ、デンプンは水に溶けないから仕方がない。
混ぜていれば戻るだろう。

「とりあえず混ぜれば…。水冷たいな。まあ、冷蔵庫に入ってたしな。あゝ…固い。何でこんな固いの？溶けないじゃん。始まるまであと15分だよ!？」

「独り言うるさいよ」

部長に言われてしまった。

「だって…固いんだもん。あ、戻ってきた」

ダイラタンシー復活!

「ただいまより一般公開を開始します」
放送がかかった。

「お!始まった!気合入れてやれよ!野郎共!」
俺が意味もなく張り切る。

「野郎共?何…?」

後輩がいちいち指摘してくる。

こうして、文化祭の一般公開がスタートした。

文化祭公開直前！（後書き）

時間の関係で短くなりました。

すいません…。

一般公開！初日！(前書き)

一般公開スタートです。

一般公開！〜初日〜

「え〜と…まずは〜。あんたら！看板持って昇降口へ急げ！曲がり角に立てかけておいて」

一般公開スタート。

しよっぱなから後輩に指示を出す。

「部長！あんたはいつまでもダイラタンシー触ってないで液体窒素の準備！もう！普通終わらせてから公開に臨むもんでしょ！」

「あ〜…わかった…」

なんでガツカリするんだ…？

看板を置きに行つてた後輩が戻ってきた。

「じゃあ次はビラ配りヨロ！」

「あんたが行けばいいじゃん」

「え〜…だって俺のブースを経営しなきゃいけないからさあ」

「何だ？俺のブースって…？」

「ダイラ」

「あ〜…あんたのブースなんだ…」

「いいから行きなさい！」

「わかったわかった」

聴き分けられない後輩を持つと疲れる。

そんなこんなで一人目のお客様。

部員が案内してスライム作りの机へ案内。

「ちよつとさあ、あんた。スライム終わったらこっちに人呼んでよ。暇だから」

スライム役に指示。

「わかった。任せとけ」

よし、これでしばらく忙しいであろう。

その後もどんどん人が入って来る。

「これはですね、やさしく触るぶんにはただの液体なんですけど、力を加えると固体になる液体、ダイラタンシーというものです」の説
明も板に着いてきた。

時々「どうやって作るの？」という説明を求められるけど…。

そんな時は「片栗粉と水を混ぜるだけです。相当な量を使いますが、家でも作ることは可能です」と返す。

大抵納得してくれる。

一番困るのは「どつという仕組み？」である。

「えつと…。力が加わらない状態ですと、水の中を片栗粉分子が漂つてる状態なんですわ。そこに圧力が加わるとですな、分子がギュッと集まるんです。それで固まるんです」という説明を。

合つてるのかな…？

さらに困るのは…

「応用されてるの？」
「ですな。」

「…分かりません…。クローゼットの除湿剤だかなんだかに使われてると言つてたような違つたような…？」

しばらくすると…。

「おい！谷津！」

ん…？

！！

中学時代の後輩がやってきた。
文化祭の日になど教えてないのに…。

「何しに来た！？」
聞いてみる。

「見に来た」

普通に返された。

そりゃそうですよね〜。

聞かなくても分かることだろう。

「ねえ、M-1やった？」

どっからその情報を〜。

「まだ…。あ、やべっ！召集時間だ！見にくんなよ！」

そう言い放ってダイラタンシーブースを後にした。

人がいっぱいいるのに後にした。

一般公開！初日！(後書き)

次回M-1からスタートです。

M-1という強敵(前書き)

M-1に挑む勇者あり。

冷たい目線には耐えれども、その後友達に苛められたり。

M - 1という強敵

特設ステージの横にて俺、召集がかかるのを待つ。

「M - 1出場者の方はここに集まってください！」
あゝ…。生徒会が呼んでいる。

行きたくない…。

このまま棄権したらどうなるのであろう…。

いや、それはさすがに良心が痛む…。

「このM - 1は1：1方式で行われます。観客の皆様は、お手元の投票用紙を面白いと思った方の箱に入れて下さい。箱は生徒会役員が持って回ります」

生徒会のルール説明。

その間俺は必至でネタを考える。

…。思い浮かぶわけがない。

「昨日部長に相談したら「カエルが一匹いました。跳ねました。ゲロゲロ」

って言ってた。意味が解らない。ネタじゃない。馬鹿なんじゃない？
何故だろう。その出来事しか思い浮かばない。
ヤバイ…。

さすがに舞台上でそれを言うわけには…。

「それではまず第一試合！科学部VS柔道部！！先攻化学部さんお願いします！

さて！お笑い芸人もびつくりのこの片菜高校のM-1！今年は一体どんなネタが飛び出すのか！？皆さん！期待してください！」

生徒会！余計なこと言うな！

とりあえず舞台上上がる。

…。緊張する。。。

ネタなんて無いよ…。

何か喋らなくては…。

「え〜と…。あの…。ネタがないんで…。まあ…大目に見て下さい」とりあえずハードルを下げよう。そう思ったその時！

「え〜！ネタ無いの〜？なんで出てんだあ？」
うるさい連中が口を出してきた。

「え？何故ネタがないか？はっは〜？皆さん知りたいたいでしょう？いいでしょう。教えてあげますよ。部長に勝手に決められて、これに出ることが俺に知らされたのは一昨日だからよ！」
嘘です。もっと前から知っていました。

「え？一昨日？つつそだあ〜？」
また口出してきた。

「ホント！嘘だと思っんなら科学部の部長に聞いてみなさいよ！多分言っから！」
部長巻き込んだ。

「あ、そうなの？じゃあ仕方ないか。後で科学部行って確認するぜ！？いいのか！？」

「いいぜ！？なぜなら！それが作戦だからよ！あははは！これで科学部の入場者数が増えるぜ！」

「しまった！？はめられた…だと…？なかなかやるな！」

「やるぜ！もつと褒められてもいい人材だと思うんだがなあ？」

「そんなことはないだろう…。」

「本音を言っな！」

「ところでさあ、何でそんな変な服装してんの？」
うおっ！？新しいパターン…。しかも普通に学ラン着てるし…。

「うん。そうなの。ちょっとYシャツに墨こぼしちゃった…わけねえだろー！変な振りは止めなさい！いくら舞台上でも対処しきれないぜ！」

「しきれてるじゃん…」

「うん…」

「あ…もう！ネタがないんで帰ります。帰って寝ます！じゃあね」

そこまで言って俺は舞台を降りた。

降りるとき階段でコケそうになったけど気にしない…。それが一番笑いが取れたことはさらに気にしない。

正直観客が口を挟まなかったらヤバかったと思う。

続いて柔道部の発表。

…。なんか普通の漫才を繰り返している。練習したんだろうなあ…。全然笑いが取れていないけど。

「さて！どっちが面白かったのか！？投票です！科学部と柔道部の方は舞台上へどうぞ！」

生徒会が指揮を取る。

いいよもう。余計なことしないで…。

「結果が出ました！科学部の勝利です！おめでとございます！」
は？

ワケガワカンネ…。

「それでは勝者の科学部にお話を伺いたいと思います」
そう言っってマイクを差し出してくる生徒会。

「えっ…と…。ネタも無いのに…なんか…スイマセン。あの…。喉乾いたんで部室戻ってイイスカ…？」
帰りたい。率直な気持ち。

「科学部には明日の決勝にも参加していただきます！」
嫌なんですけど…。

そんなこんなで部室に戻る。

すると、後輩たちが待っていた。

「え〜、予選通ったの？やるじゃん〜…」
あ〜…、嫌味にしか聞こえない。

「結構面白かったよ。最後の階段から落ちたということか」

「あれは落ちたんじゃなくて…えっと…降りたの！ってか見てたの？見んなったのにさあ！」

「うん見てた。ほら」

そういつて携帯電話を取り出した後輩。

何やら再生し始めた…。

「ね？録画した」

「お前…。この野郎！」

本当に後輩なのだろうか？

「あ〜もうほら！違う教室見てきなさい！」
強引に後輩を化学室から追い出した。

「ふう。あとはダイラ見てるだけだ……」
そっと呟いて自分のブースに戻った。

そのまま今日は一般公開終了。

ダイラタンシーを流して新しく作り変えた。
ブルーシートも掃除した。

これでまた明日も大丈夫。

「よし！部長！帰るぞ！」
部長に声をかけた。

しかし…。

「スライム作ってるからあと5分まってくれえ！」

無視して帰ることにした。

明日一日も頑張ろう。
俺はそう心に誓った。

M・1という強敵（後書き）

あ…。

やっと初日が終わりました。

相当引つ張りました。というか、区切ってったらこうなりました。

いや、正直に言うんですけどね、一気に書く時間が無かったのでちょっとずつ書いてたんです。

次回から文化祭二日目に突入します。お楽しみに！

次回かその次か…。文化祭終了とともに物語を終わらせたいと思っ
てます。

そのうち番外編でもやろうかね…。

（2/6に「学園」ジャンルのランキングで6位になりました。心
から感謝いたします。）

一般公開―二日目―(前書き)

一般公開二日目です。

一般公開！〜二日目〜

ピピピピピ...

ガシヤツ...

目覚ましが鳴った。

「ん...。あ、朝か？朝なのか？」

誰に聞く訳でもないけど言ってみる。

いつものように寄り道せずに学校へ。

そして向かうは化学室。

扉がないと違和感が...

取り合えず冷蔵庫のダイラタンシーを取り出して準備する。

「全く！良いよなあ！ダイラタンシー以外はほっとけばいいんだから。俺は今からこれをかき混ぜなきゃいけないんだぜ!？」

大した作業じゃないように聞こえるかもしれないけど、水と分離し沈殿した片栗粉を元に戻すのは結構大変。

片栗粉が剥がれないし、固いし、水は冷たいし...

いじくってればなんとかなるんだけど...

「今日も一年生はビラ配り！全部配ってきてね。部長は液体窒素任せた。その他は持ち場に着け！」
昨日と変わらない指示を出す。

部長の仕事だと何回言えば分ってくれるのだろうか？

「只今より一般公開が始まります」
放送がかかった。

「よっしゃ！最終日だ！皆フアイト！」
適当に応援して幕を切った文化祭二日目の一般公開。

今日は出だしから客足が良い。

ダイラタンシーも一つ数を増やして一度にたくさんの人が体験できるようにした。

そんな中…。

「今から液体窒素の実験やります！前に集まってください！」
部長がやっとな動いた。

「谷津、ちょっと来てくれねえ？」
部長からお呼びがかかった。

前に集まってお客もいなくなったダイラタンシーを手の空いている後輩に任せて部長の元へ。

「今からですね、まずはこのバラを入れたいと思います。これ…結構高いんですね。」
部長が言った。

「余計なことを…早く入れなさいって！」
部長に口出しする俺。

「では、入れます」

液体窒素に入れたバラは、白い煙を出している。

「握ります」

握られたバラは粉々になった。

おお〜という歓声。

「で、これからこの横にいる谷津が、花弁を食べます。比較のためにまずは冷凍してないのも食べてもらいましょう」

！？貴様！！そのために呼んだのか！台本に無いぞ！そんなの！

「こいつは昨日M-1で面白くなかったって噂なので」

何を言っているんだ？

面白くはなかったかも知れんが予選通ったじゃないか！

しかし…この大人数の前で嫌とは言えん…。

「大丈夫なのか？これ、大丈夫なのか？バラって食えんの？」

「大丈夫じゃん？知らないけど」

「え〜。適当じゃん…」

「いいから食べー！」

仕方なく食った。おいしくない…。

「次は冷凍したのを食べます」

…。

「痛っ！下にくっついた！あ、でも…おいしくない…」

「いいよ、味は。食感は？」

てめえ…。

怒りをこらえてのコメント。

「シヤリシヤリしてるような…。よくわからん」

「じゃあ次はバナナ！バナナ入れますよ」

その時に観客の中から「釘打つんだ」という声が聞こえた。そりゃあ、まあ。。。

「はい、入れました！釘を打ちたいと思います」

これがまた打てるんですね。実験は成功！

「で、もったいないのでこいつが食べます」

…。悪夢再び…。

とりあえずかじってみる…。
皮が剥けない…。

「そのまま食べー！いいからー！」
部長うるさい。

「あ、かてえ…。皮まずい…良いこと無い」

「良いことは無いそうです」

見りゃわかるだろう…。リピートせんでええ！

すると…

「これ試してくれませんか？」と観客からコーラを差し出された。

「いいですよ」と部長が快く了解。

「じゃあ入れます」

液体窒素に入ったコーラはすぐに凍った。

「食べてみます？」

部長が差し出した観客へ凍ったコーラを差し出す。

あれ？俺には無いの？

「うん。おいしいよ。普通にコーラを凍らせたやつだ」
これが観客のコメント。

「そりゃ、凍らせただけですからね」

部長…。そりゃ言っちゃいかんだろつ…。

「次は、この化学室で使っている水道水からカルキを取り除いた純水を入れたいと思います」

純水を入れる。すると、入れた時の形がそのままの状態で氷になる。

「はい、これも食べてもらいましょう」
後で部長殺す……。

「え〜と……。氷です。冷凍庫でできますね。でもこれが一番おいしいですね」

「次はマシユマロです！これは皆さんにお配りします」

凍ったマシユマロは結構美味いんですわ〜……。

美味しい物は回ってこないんですね……。

「次！インスタントラーメン入れます。比較のため、そのままのお湯を入れない状態で食べてもらいましょう」
もう……食わせたいだけだろ……。

「うあ……パリパリする！……味が欲しい……」

ここで観客からまたもコメントが。

「何でそんなになんでも食べるんですか？」

俺にコメントか……。

「え〜と……。お仕事だからです……」

「カップ麺ができました。では入れます」

スープがカチカチのインスタント麺。

「はい、食べて」

部長、今まで一つも食べてませんよ。

「あ…冷えた麺って美味しくない！まずい！」

「はい、食品関連ラスト！裂けるチーズ！」

裂けなくなりました。

「食べて」

どんだん言葉が無くなっていく…。
最後は三文字なんですね…。

「あ…。硬い…。おいしくないねえ…」

「結果！マシユマロ以外失敗です！」

導き出せた結果これだけ！？嘘でしょ！？

「次は、空気を入れたビニール袋を入れます」

入れるとどんだん袋が縮みだした。

「下の方に液体があるのがわかりますかね？それが液体酸素です。
この実験で、酸素が液体になる温度は窒素よりも高いということが
分かりました」

「次を最後の実験にさせていただきます。ここにいる谷津に手を入れてもらいます」

あゝ…それも自分ではやらないのね…。

俺は液体窒素に一瞬手を入れる。

「ほら！大丈夫でした〜！」

「これはですね、液体窒素と手の温度差が非常にあるので、一瞬手の周りの液体窒素が気体になるんです。ですから手は大丈夫なんです」

部長に変わって俺が説明。

「以上です。ありがとうございました」

そこまで終わったところで生徒会が来た。

「M-1出場者の方は召集がかかっていますので急いで来てください」

しまった…。昨日勝ってしまったから今日の決勝があるんだ…。忘れてた…。

嫌だ…。昨日負ける気だったのに…。

昨日より人多いよ…。

こうして今日も特設ステージに立つことになりました。。。

一般公開！〜二日目〜（後書き）

液体窒素で固めたものですが、本当にマシユマロ以外失敗です。

因みに、作者はマシユマロ嫌いなので食べてませんよ（笑）

文化祭前日に部員全員でガスバーナーで焼いて食べたなら文化祭で使う分が無くなって、慌てて買ってきたっていう裏話があります。

M-1?何それおいしいの? (前書き)

M-1からスタートです。

M - 1? 何それおいしいの?

「今回は4人のうち一人だけを選んでいただきます!」
生徒会から観客へ説明が入る。

只M - 1のルール説明中。

まあ、やる側にはあんまり関係ないんだけど…。

そんなことより…。

ネタどうしよう…。

相変わらず無いよこれ。

後輩が「先輩、そんなのはですね。一発芸ビシッと決めて帰ってくればいいんですよ!最短制限時間はないんでしょう?」「って言うってだ。

それは正直…。

「それだは始めます!まずは科学部からです!科学部の方お願いします」

あ…。始まってしまった…。

とりあえず舞台へ。

「え〜と…。こんにちは。ネタがないんですけど…。あ〜と…。あの…。嫌なんですけど…」

さて、どうやって場をつなげよう？

「あゝもう！ねえ！どうすりゃいいの！？もう！なんか適当に喋るとく？うん。もう。それが良いね」
適当に進める。

お、観客の中に携帯で動画録ってるクラスのやつ発見！
これは使える…！

「はい！そのの！携帯で動画録ってる人！俺の代わりにモノマネやっつてー！」
もうムチャブリ。

「は？え？俺？待てよ！いやいやできねえよ！何言ってるんだよ！ムチャブリもいとこだよ！」
なかなかのリアクション。

「だってさ、皆さん。皆さんだって見たいでしょう？ねえ」
強引に進める…。

「あゝ…。分かった。じゃあ…。えゝと…。数学の先生のモノマネ」
「！」

「いや、通じないから！」

「そう？じゃあ…。校長のみつちーのモノマネ！」

「いやそうじゃなくて！しかもみつちーって…。おい、本人あそこ」
「…」

「うお！？ああ……。ゴメンナサイ！家畜の豚のモノマネやります」

「いや、常にしてるじゃん……」

「いやしてねえよ！どどういう意味！？」

「そのまんまの意味！ほらそろそろやって！俺は速く引っ込みたいんだから……！」

「勝手だな！ムチャブリしといて引っ込みたいとか！じゃあ……そんなあ。飛び立つ蛾のモノマネ！」
そついうと無駄に手をバタバタさせた。

「あははは！その顔止めるよ！あはははは！」

「顔は普通だった！手を見る手を！」

「あ？ああ……」

適当に流す。

「では！俺はこころへんで撤退しますよ！失礼しました！とう！」

はあ、やっと終わった……。

俺のネタというかあいつのネタのような……。

まあいいや。

「科学部のみなさんありがとうございました。続いては……」
生徒会のアナウンス。

え？皆さん？

あいつは科学部じゃないよ…。

まあいいか。

全チームの発表終了。

「それでは皆さんはステージに上がってください」
生徒会にそう言われてステージに上がる。

「集計が終わりました。優勝は〜…」

…。引つ張るねえ…。

「地学部の皆さんですー！」

はい？あれ…？科学部じゃないのかー？

普通小説ってのは主人公が勝つものじゃないの？
おかしくねえ？

「地学部には学食で使える500円分の商品券が貰えます」
いいなあ〜。

「それでは地学部の皆さん。コメントをどうぞ」

「いやあ、やりました」

あれ？それだけ？

まあ、そんな感じで幕を閉じたM-1。

俺はそのまま化学室へ。

「お〜！M-1どうだった？」

聞いてきたのは部長。

「あ〜？どうしてもないよ。なんだよあれは…」

「負けたんだ…」

「勝つ気無かったしなあ〜」

そんな会話をしてダイラタンシー体験場へ。

相変わらず人は来ている。

いつものように接客していると…。

「只今の時間を持って一般公開を終了いたします。グラウンドにて後夜祭を行いますので、是非ご参加ください」というアナウンスが。

「終わった…」

そつと呟いた。

「本日はこれで終了です。また来年もよろしく願います。また、後夜祭は一般の方も参加いただけます。是非ご覧になってください。」

打ち上げ花火もありますよ」「
そう言つて部屋の中にいる一般客を外に追い出す。

「部長！後夜祭どうする？」
俺が部長に質問。

「え〜？花火は見たい」

「だよね」

「でも時間がある」

「だよね。あ、そうだ。液体窒素余つてないの？適当に凍らせて食べようよ」

「余つてない。窒素も食材も」

「つまんないの…。」

仕方ないので雑談して時間をつぶす…。

1時間後…

「そろそろ行くつぜ！」
俺が促す。

「どこで観る？」

「そりゃあ、二階の通路でしょ！」

「ああ」

二階の通路…。

去年見つけた誰も来ない特等席。

「只今より花火を打ち上げます。最前列の方が線の所になるまで下がってください」

と外で言っているのが聞こえた。

「お！始まるぞ！」

すると…。

ピュウ〜…ダーーン！！

花火が打ちあがった。

「願わくば、隣にいるのがあんたじゃなきゃねえ…。あんたもそう

思わない？」

俺が部長に言う。

「あ？彼女ってこと？」

「まあ、そういうこと」

「あ…。確かにねえ。今日呼んだけど予定が入っちゃってたみたいなんだよねえ」

「は？な…え？彼女いるの？」

「いる。西東京に」

「はあ？マジ？」

「マジ」

何だ…？この衝撃的な展開は…。

「花火綺麗なあゝ」
「適当にごまかした。」

「これにて後夜祭は終了です。ありがとうございました」
外でのアナウンス。

ふうう〜…。
終わった〜。

「部長、帰ろう」

現在 8 時。

久しぶりに帰りが遅くなったのでした。

M-1?何それおいしいの?(後書き)

翌日の学校。今日は月曜日。

今日は片づけをするために登校日。

明日と明後日は代休。

文化祭のときそのままの化学室。
散らかっている。

ビーカー、ガラス棒、洗濯のり…。
目につくもの全てを片づける。

俺はダイラタンシー担当だからダイラタンシーとブルーシートだけ
なんだけど…。

ガラガラガラ…。

扉が開いて部長が入ってきた。

「部長!写真見せて!」

突然の一言に戸惑う部長。

「何の?」

「彼女」

「ああ…。そのうちね」

「え〜…」

部長は片づけを始めた。

「ほぐら。お前もやれって」
部長に流されてしまった。

40分後…。

「よし！片づけ終了！」

いつもの化学室に戻った。

また来週からいつも通りの部活が始まるのであろう…。

寂しいような、何と言つか…。

文化祭楽しかったな。

「あ、部長！文化祭の人気投票！あれ、こちらは40票入ってたよ
！」

俺が部長に報告。

人気投票つてのがあって、お客さんがどの部活が一番面白かったかを投票するボードがある。一番面白かった部活の名前の所にシールを貼って貰う仕組み。

「ああ、あれ？俺さあ、昨日2枚くらいシール貼つといたんだよね」

「ああ？じゃあ…。38票すか…。まあいいか。結構入ってる。入ってない部活もあるくらいだから良い方なんじゃない？」

「応援団とか100超えてるけど？」

「それは知らん」

人気も結構あったらしい。
良かったよかった。

こうして、今年の文化祭は完全に幕を閉じたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3080q/>

我ら科学部！

2011年7月11日20時44分発行